

報道関係者 各位

2020年4月2日  
公益財団法人日本デザイン振興会

## 「2020年度グッドデザイン賞」応募受付を4月2日(木) 開始 新審査委員長に安次富隆氏が就任

公益財団法人日本デザイン振興会(会長:川上元美、所在地:東京都港区)は、4月2日(木)より、主催事業である2020年度グッドデザイン賞の応募受付を開始します。応募はグッドデザイン賞のウェブサイトにて受け付け、締め切りは6月2日(火)です。

グッドデザイン賞は、1957年から続く日本を代表する世界的なデザイン賞として、毎年国内外の企業や団体、デザイナーなどが多数応募し、これまでに多くの優れたデザインが受賞してきました。昨年度は、4,772件の応募を対象に審査を実施した結果、過去最多の1,420件が受賞しています。



グッドデザイン賞ロゴマーク「Gマーク」



2019年度審査会風景



2019年度大賞授賞風景

### 新たな審査委員長が決定

新たに審査委員長として、安次富隆氏(プロダクトデザイナー、ザートデザイン取締役社長)が就任し、審査副委員長は、昨年に引き続き、齋藤精一氏(クリエイティブ/テクニカルディレクター、ライゾマティクス・アーキテクチャー主宰)が務めます。プロダクトをはじめ、建築、コンテンツ、ビジネスモデルなど、多様化が進むグッドデザイン賞の審査において、異なる専門分野を持った正副委員長を中心に、総勢約90名の審査委員が、さまざまな視点から応募対象を読み解きます。



安次富 隆氏

### 応募について

応募対象: 2021年3月31日までにユーザーが購入または利用でき、2020年10月1日の受賞発表日に公表が可能な、商品・建築・アプリケーション・ソフトウェア・コンテンツ・プロジェクト・サービス・システムなど。デザインの用途は一般用・業務用を問わず応募が可能。

応募資格: 応募対象の事業主体者、およびデザイン事業者。

応募費用: 審査費、出展費など段階に応じた費用が発生。ただし岩手・宮城・福島に事業本拠地を置く応募者は応募費用を免除。

応募方法: グッドデザイン賞ウェブサイト([www.g-mark.org](http://www.g-mark.org))の応募専用ページで、審査に必要な事項を6月2日までに登録。

本件への報道関係者のお問い合わせ: 担当: 森(株式会社電通パブリックリレーションズ)

Tel: 080-2022-3730

E-mail: [y-mori@dentsu-pr.co.jp](mailto:y-mori@dentsu-pr.co.jp)

一般からのお問い合わせ: 公益財団法人日本デザイン振興会 グッドデザイン賞事務局

Tel: 03-6743-3777 E-mail: [info@help.g-mark.org](mailto:info@help.g-mark.org)

## おもなスケジュール

4月2日(木)～6月2日(火) : 応募受付期間

6月3日(水)～9月3日(木) : 一次審査、二次審査期間

10月1日(木) : 受賞発表[グッドデザイン賞、グッドデザイン・ベスト100、ロングライフデザイン賞]

10月8日(木) : グッドデザイン・ベスト100デザイナーズプレゼンテーション(一般公開)

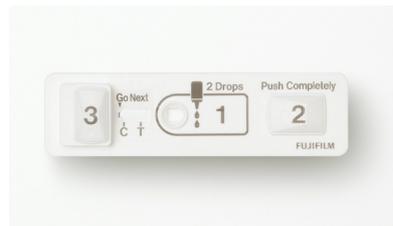
10月30日(金) : 受賞祝賀会、大賞選出会、発表[大賞、金賞、グッドフォーカス賞]

10月30日(金)～11月3日(火・祝) : 受賞展「GOOD DESIGN EXHIBITION 2020」(一般公開)

## 賞の種類と受賞プロモーション

グッドデザイン賞は、「グッドデザイン賞」、および、特別賞の「グッドデザイン大賞」、「グッドデザイン金賞」、「グッドフォーカス賞」で構成されます。

グッドデザイン賞受賞対象のうち、特筆して優れた100件は「グッドデザイン・ベスト100」として選出されます。このグッドデザイン・ベスト100より「グッドデザイン金賞」、「グッドフォーカス賞」、「グッドデザイン大賞候補(ファイナリスト)」が選出され、「グッドデザイン大賞」はグッドデザイン大賞候補の中から決定されます。



参考 : 2019年度グッドデザイン大賞  
[結核迅速診断キット]

グッドデザイン賞 : 優れたデザイン

グッドデザイン大賞 : 2020年を象徴する「デザイン・オブ・イヤー」

グッドデザイン金賞 : デザインとしてのバランスが卓越し、将来へのモデルとなるデザイン

グッドフォーカス賞 : 以下の4つの社会的テーマに対する高い提案性を備えるデザイン

- 新ビジネスデザイン / 新しいビジネスモデルや産業の創出、イノベーション促進に寄与するデザイン
- 技術・伝承デザイン / 高度な技術・技能から生まれた製品のデザイン
- 地域社会デザイン / 地域社会の発展・活性に貢献するデザイン
- 防災・復興デザイン / 防災や大規模自然災害の復興に寄与するデザイン

受賞デザインは10月30日(金)から、東京ミッドタウン(六本木)で開催する受賞展「GOOD DESIGN EXHIBITION 2020」で紹介するほか、国内外で開催する展示会や見本市、販売イベントなどでも紹介を行います。

## 開催概要

- ・主催 : 公益財団法人日本デザイン振興会
- ・後援 : 経済産業省、中小企業庁、東京都、日本商工会議所、日本貿易振興機構(JETRO)、国際機関日本アセアンセンター、日本経済新聞社  
(一部に後援予定を含む)

## グッドデザイン・ロングライフデザイン賞への応募受付も4月2日(木)より開始

私たちの生活を築き、これからも変わらずその役割を担い続けて欲しいデザインに贈られる「グッドデザイン・ロングライフデザイン賞」への応募も、4月2日(木)から開始します。

なお、この賞には企業やデザイナーによる応募のほか、商品のユーザーなどからの一般推薦も可能です。

**\* 本リリースに記載のスケジュール、名称などは今後変更される場合があります。**



## 参考 / グッドデザイン賞について

1957年に開始された日本を代表するデザイン賞。商品をはじめ建築、各種のアプリケーションやソフトウェア、デザインを活用したプロジェクトや取り組みなど、生活環境を構成する有形無形のさまざまな対象に贈られる。「社会を前進させるデザイン」という考え方の下、受賞デザインに関する展示や出版、各種のイベントなど多彩なプロモーションを展開することで、受賞者の価値の向上に加え、社会へのデザインの普及を促し、デザインの可能性を高めることに一貫して貢献している。そのためグッドデザイン賞は84%の認知率\*を誇り、シンボルマークの「Gマーク」も広く親しまれている。これまでの累計受賞数は48,000件以上となる。

\*日本デザイン振興会の2020年度インターネット調査による。

## 参考資料:

### 2020年度グッドデザイン賞 審査委員長・審査副委員長のご紹介

#### 審査委員長:安次富 隆



プロダクトデザイナー  
有限会社ザートデザイン 取締役社長

ソニー株式会社デザインセンターを経て、1991年に有限会社ザートデザインを設立。2008年より多摩美術大学生産デザイン学科プロダクトデザイン教授。情報機器や家電製品などのエレクトロニクス商品のデザイン開発、地場産業開発、デザイン教育などの総合的なデザインアプローチを行っている。

いま、私たちは国連で採択されたSDGsのように、早急に解決すべき世界共通の課題を数多く抱えています。グッドデザイン賞でも、直近の課題に取り組むデザインが増えてきました。それらに共通していることは、人々の気持ちを感じ取り、それに応えたいという思いをベースにしていることでしょう。そこでは、デザインを介して人と人がお互いの感情を通わせる交感が行われています。表層に見えてくる、しくみや製品は、思いを具体的に機能させるための装置です。装置は技術で作ることができますが、交感、生来人に備わった言葉を超えたメタレベルのコミュニケーション能力です。デザインでは常に、装置と交感がセットになっています。交感が装置を人や社会に実装させるのです。

この文章を書いている今も、新型コロナウイルスが世界で拡散し続けており、私たちが不安に陥れています。この世界的な問題の根本的な解決は、医学に頼らねばなりません。瞬く間に店頭から消えてしまったマスクの問題は、医学では解決できません。この問題を解決できるのは、交感によって得た人の気持ちを勘案した装置をつくれるデザインであると考えられないでしょうか。その装置は、しくみかもしれないし、製品かもしれない。デザインにとって重要なことは、アウトプット方法の違いではなく、装置が人々の気持ちを反映しているかどうかなのです。

グッドデザイン賞への参加の意義の一つは、同じ時代の多様なデザインを俯瞰し、自己のデザインを客観できることにあります。デザインがカバーする領域は拡がり続けており、その表層性だけで比較することはできません。しかし、デザインに含まれる装置と交感を見極めることができれば、自らの立ち位置や、アプローチの適正さについて、デザインの姿形に囚われずに比較でき、未来を明るくするヒントを見出すに違いありません。できるだけ多種多様なデザインが一堂に会することを願っています。

安次富 隆

## 審査副委員長: 齋藤 精一



クリエイティブ／テクニカルディレクター  
ライゾマティクス・アーキテクチャー 主宰

コロンビア大学建築学科で建築デザインを学び、2000年からニューヨークで活動を開始。その後、フリーランスのクリエイターとして活躍後、2006年にライゾマティクスを設立。建築で培ったロジカルな思考を基に、アート・コマーシャルの領域で立体・インタラクティブの作品を多数作り続けている。国内外にて受賞多数。

世界はものにあふれています。世界はことにあふれています。それら全てが誰かのアイデアから生まれたデザインであるし、全てが手のかかったクリエイションです。その中で、人々の毎日を少しでもより良く、それを積み重ねて世界をより良く変えようとしているデザインは幾つあるでしょうか？直接的でも、間接的でも、どのような表出を伴っていてもよいと思います。より良くしたい心を持って創っているかが大切だと思います。私はグッドデザイン賞を通して、そんな心から生まれたものごとをできる限り多く見つけたいと考えています。

いまの時代は「新しい地層形成の始まり」とも言われています。そのため、従来の常識が及ばないことがこれからも次々と起こることが予想されます。その原因として、私たちが私たち自身＝人間とは何であるか？という哲学的な問いを忘れ、技術革新に没頭してしまった末に世界の変化を見落としてしまっていたのかもしれない。

そんな時代にデザインは何ができるのか？今年もこの大きな問いに対して審査委員との議論を積み重ねて、今ならではの指針を見つけたいと思います。

今年度は一昨年の「美しさ」、昨年の「共振力」の文脈を受け継ぎ、次のステップである「交感」をテーマに掲げます。大きな変化が起きる状況の下で、個の力だけではなく既存の業界やスケール、コトやモノの枠を超えた大きなうねりが必要だと考えます。感覚や感性、感動が交わることで世界中の社会・人に必要なデザインが生み出されると強く感じます。今年も数多くの「交感」する力を持った作品と出会えることを楽しみにしています。

齋藤 精一